



異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」：プロジェクト紹介と活動報告(2023年度)

梅村, 麦生
梶尾, 文武
佐々木, 祐

(Citation)

海港都市研究, 19:65-70

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488382>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488382>



異分野共創研究ユニット『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」

——プロジェクト紹介と活動報告（2023年度）——

梅村 麦生、梶尾 文武、佐々木 祐

(UMEMURA, Mugio; KAJIO, Fumitake; SASAKI, Tasuku)

I. はじめに

本稿は、神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会による異分野共創研究ユニットとして2023年度に採択された、『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット（ユニット・リーダー【PI】：梅村麦生）のプロジェクト概要の紹介と、活動報告をおこなうものである¹²⁸。

まず次節で、本研究ユニットによる「文化交渉学」の構想を、研究ユニットの立ち上げにかかる背景と目的に基づいて紹介し、続く三節で研究ユニットの体制と参加メンバーを、そして四節で本稿執筆時点（2023年12月）での活動報告と予定を紹介する。

II. 文化交渉学について——研究の背景と目的

旧来、異文化間の関係や交流は、人文系諸分野の主たる研究対象となってきた。そうした異文化間の関係や交流は、交通インフラや通信技術の発展、あるいはグローバル化の進展を経て、今日いっそう複雑性と多様性を増している。

しかし文化をめぐる数多くの研究がすでに明らかにしてきたように、「一つの文化」と見なされてきた文化であっても、異文化との交わりによる変化を経たことのない文化は存在しない。いまや外界から隔絶した文化がありえないとするならば、いかなる文化であれそうした交流による変化の可能性に、つねに開かれている。なおかつ、その「一つの文化」の内部にあっても、実のところ異質で多様な要素が含まれている。

したがって、「一つの文化」が「異なる文化」と接触するとき、各々の文化を構成する種々の要素にさまざまな反応が引き起こされ、それらが相互に反応し合うこともあるだろう（例：階級差、ジェンダー、宗教）。また、二つの「異なる文化」が接触する際にも、両者の関係は実のところ一対一の関係にとどまらず、同時代に存在している他の諸文化や、それらの異文化間の接触に対して歴史的に先行する交流の経緯が、しばしば影響を及ぼしている（例：多国籍な移民コミュニティ）。さらには、ある文化を構成する諸要素のうち、異文化の影響を強く受けて成立したものが、やがて一つの文化を象徴するものとなり、文化の再定義が行われるといった現象も広く見られる（例：MANGA、食文化、民族衣装）。

¹²⁸ 神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会による異分野共創研究ユニットの概要については、神戸大学ホームページ内で公開されている（「異分野共創研究ユニット」、https://www.kobe-u.ac.jp/research/projects/co-creative_unit/index.html, 2023年12月4日最終閲覧）。また2023年9月13日に開催された異分野共創研究報告会については、同ホームページの以下の記事を参照のこと（「学術研究推進機構 異分野共創研究報告会を開催しました」、https://www.kobe-u.ac.jp/NIEWS/info/2023_09_27_01.html, 2023年12月4日最終閲覧）。また本稿は、梶尾と佐々木が起草した本研究ユニットのユニット構想に基づき、梅村が執筆した。

そこで本研究ユニットは、そうした異文化間の複雑な関係や交流の具体的な展開局面を、異文化間や文化内で相互に変容をもたらしうる契機としての「文化交渉」の過程と捉えて追求する、「文化交渉学」という新しい研究分野の創出を目指している。つまり「文化交渉」という枠組みのもと、さまざまな専門分野の研究者たちが分野横断的な共同研究を積み重ねることによって、そうした異文化間の複雑な関係と交流の具体的な様相と、「一つの文化」と「異なる文化」のあいだの関係が変化していく過程を究明する研究分野として、「文化交渉学」の創出と確立に寄与することを目的としている。

なお、「文化交渉」と「文化交渉学」の構想に関しては、本邦では先行する「東アジア文化交渉学」プロジェクトの試みのなかで、以下のような提起がすでになされている¹²⁹。

「文化交渉学」の語は近年ようやく一般にも知られるようになり、市民権を得つつあるように思われる。この語は、それぞれの文化は孤立しておらず、他地域の文化と互いに接触し、刺激や影響を与えあい、時には反発しあいつつ展開していくと見る視点が込められている。一言でいえば「文化は交渉する」、あるいは「文化は越境する」という視点のもとに諸文化の形成や展開、受容や変容をダイナミックにとらえていこうとするのが文化交渉学の特色といえよう。このような視点は従来にもなかったわけではないが、文化事象や人文学の場においてそれほど自覚的に用いられてはいなかったように思う。……

さて、文化をこのように考えるとき、当然ながら導き出されるのは、「文化は孤立していない」という観点であり、「文化は固定していない」という観点である。

(吾妻 2016: v-vi)

本研究ユニットも、以上で示唆されている問題関心を共有し、個別の文化研究や地域研究にとどまらない、分野横断的な研究領域としての「文化交渉学」への展開を目指すものである。

またこうした視点は何より、「フィールドとしての海港都市」に加えて「方法としての海港都市」の構想を提起してきた(佐々木 2007: [iii])、本誌および海港都市研究センターによる「海港都市研究」の取り組みの発展形としても、位置づけられるものである¹³⁰。その表現を借りれば、「フィールドとしての文化交渉の場」と「方法としての文化交渉学」との双方が、本研究ユニットの研究対象となる。

¹²⁹ 同プロジェクトは、文部科学省平成 19 年度(2007 年度)グローバル COE プログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成一周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出―」(機関名: 関西大学、拠点リーダー: 陶徳民)による「文化交渉学教育研究拠点」(Institute for Cultural Interaction Studies, ICIS)の設置に始まり、並行して 2009 年には「東アジア文化交渉学会」(Society for Cultural Interaction in East Asia, SCIEA)が設立されている。詳細は、藤田(2008)、陶(2009, 2012)、吾妻(2016)などを参照のこと。

¹³⁰ 『海港都市研究』「創刊の辞」より、冒頭の部分を以下に再掲しておく。「海港都市研究センターは、東アジアの「海港都市」を研究のフィールドとして、国民意識の分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築していくための条件を究明することを目的に設立しました。言葉を換えて表現するならば、海港都市を、国家を超えた地域的な交渉の広がりの中で、文化の様々な側面が受け継がれ、異質なものが動的に混交し、革新的な思想と人材が形成される「共鳴空間の場」としてとらえて、人の生きる様々な姿を研究することに目的があります。海港都市を「共鳴空間の場」とすることができるのは、近代資本主義が先導するグローバリゼーションの遥か以前から人・モノ・文化の交流の場として機能してきた歴史性、海洋に開かれた国家の領域にとどまらない開放性、そして異文化の混交・衝突・組み替えの経験の蓄積を海港都市が社会的性格として持っているからだと考えます。海港都市研究センターは、こうした社会的性格が形成される過程とそのメカニズムを文学、歴史、社会の広い領域から総合的に研究することを目指しています」(佐々木 2006: [iii])。

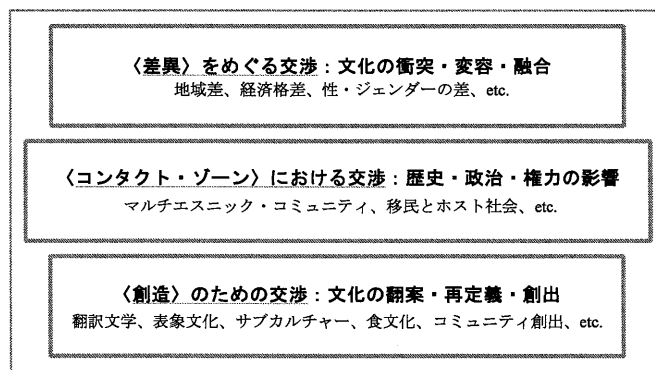
III. 「文化交渉」の三層へのアプローチ——研究体制

これまでに記してきたように、異文化間や文化内のさまざまな局面で「文化交渉」の過程が生じていると考えるならば、そうした「文化交渉」のどのような局面に注目するかに応じて、異なるアプローチが考えられる。

例えば、文化交渉が生じる歴史的過程、文化交渉を媒介するメディア、文化交渉の場となる社会的・地理的な諸関係のいずれに注目するかに応じて、歴史学的、言語学的、文学的、芸術学的、メディア論的、社会的、地理学的、等々のさまざまなアプローチで文化交渉に接近しうる。

そこで本研究ユニットでは、個々の「文化交渉」の局面を貫く各層として、(1) 文化の衝突・変容・融合に関わる「〈差異〉をめぐる交渉」、(2) 歴史・政治・権力が作用する「〈コンタクトゾーン〉における交渉」、(3) 文化の翻案・再定義・創出に関わる「〈創造〉のための交渉」という三つの層を取り上げ、それぞれの層に即して研究をおこなう。

「文化交渉」の三層構造



そして本学の人文科学研究科と国際文化学研究科の研究者らによる、上記の三つの層に即して構築される以下の研究体制のもとで、個別研究と共同研究を踏まえて、分野横断的かつ総合的に「文化交渉学」を創出することを目指す。

『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」研究体制

「文化交渉学」 創出にむけた 研究ユニット ・共同研究 ・ワークショップ ・シンポジウム ・最終報告会	「〈差異〉をめぐる交渉」研究班 菊地 真 (人文学研究科准教授 地理学) 災害地理学・海事資料研究 吉川圭太 (人文学研究科講師 日本史) 社会運動史・地域歴史資料研究
	「〈コンタクト・ゾーン〉における交渉」研究班 佐藤 昇 (人文学研究科教授 西洋史) 古代ギリシャ文明史 佐々木祐 (人文学研究科准教授 社会人類学) 移民研究・外国人労働者研究 梅村麦生 (人文学研究科講師【PI】社会学) 亡命知識人研究
	「〈創造〉のための交渉」研究班 梶尾文武 (人文学研究科准教授 国文学) 「港町神戸の同人文学」研究 板倉史明 (国際文化学研究教授 映画学) 「移民と映画」研究 辛島理人 (国際文化学研究科准教授 国際関係史) 「アジアの中の日本」研究

IV. 2023 年度活動報告と予定

本研究ユニットでは、「文化交渉学」に関する知見の共有と、各専門分野のあいだでの対話を進めるため、共同企画を複数実施する予定である。本稿執筆時点（2023 年 12 月時点）ですでに実施したものを含めて、本研究ユニットが主催または共催する共同企画は、以下の通りである。

(1) 2023 年度 第 1 回 文化交渉学ワークショップ

- ・ 題目：「亡命社会学者と境界移動の経験：社会とその学問の境界を問い直す」
- ・ 講師：吉野浩司氏（鎮西学院大学教授）、吉田耕平氏（鎮西学院大学准教授）
- ・ 日時：10 月 20 日（金）15:10～17:30 場所：神戸大学文学部

(2) 2023 年度「大学発アーバンイノベーション神戸」共催企画①

- ・ 題目：大学発アーバンイノベーション神戸『「外国ルーツの子どもたち」支援を軸とした多文化都市創生のための実証的研究』研究チーム&一般社団法人グローバル多文化社会研究所共同勉強会
- ・ 講師：恒吉遼子氏（文京学院大学副学長／東京大学名誉教授）、額賀美沙子氏（東京大学教授）
- ・ 日時：11 月 3 日（金・祝）15:00～17:30 場所：神戸大学グローバル教育センター
- ・ 共催：神戸大学『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット

(3) 2023 年度 第 2 回 文化交渉学ワークショップ

- ・ 題目：「国際移民の時代と地域社会の変容」
- ・ 講師：二階堂裕子氏（ノートルダム清心女子大学教授）
- ・ 日時：11 月 17 日（金）17:00～18:30 場所：神戸大学文学部

(4) 映画上映会と討論会

- ・ 題目：映画『ガーダ パレスチナの詩』（古居みずえ監督）上映と共同討議
- ・ 日時：12 月 7 日（木）17:00～20:00 場所：神戸大学文学部

- ・ 討論者：岡真理氏（早稲田大学教授）
- ・ 主催：神戸大学教職員有志、神戸大学教職員組合文学部支部、海港都市研究センター、神戸大学『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット
- ・ 共催：神戸定住外国人支援センター

(5) 国際研究集会共催企画

- ・ 題目：「広東外語外貿大学・神戸大学 近現代文学国際研究発表会」
- ・ 発表者：周雯氏、方志娟氏、王璐氏（広東外語外貿大学大学院）、白井耕平氏、西田正慶氏、霍思静氏（神戸大学大学院）
- ・ コーディネーター：劉夢如氏（寧波大学）
- ・ 日時：2024年1月28日（日）11:00～17:00〔オンライン〕
- ・ 共催：神戸大学『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット

(6) 2023年度「大学発アーバンイノベーション神戸」共催企画②

- ・ 題目：「外国ルーツこども支援当事者によるシンポジウム」（仮）
- ・ 日時：2024年2月下旬（予定） 場所：神戸大学グローバル教育センター（予定）

(7) 2023年度「文化交渉学」創出のための共同研究ユニット 最終研究報告会

- ・ 日時：2024年3月中旬（予定） 場所：神戸大学文学部（予定）

以上の企画のうち、2023年10月20日と2023年11月17日に実施した2回にわたる「文化交渉学ワークショップ」については、各回のワークショップ内でおこなった3名の講師による講演の要旨を、次稿以下で紹介する。

V. おわりに

本研究ユニットは、本学の人文学研究インスティテュートとそのもとで展開されてきた、日本文化社会インスティテュートや海港都市センター等を始めとする諸プロジェクトによる研究成果に立脚し、人文学研究科と国際文化学研究科の研究者によって立ち上げられた。

そうしたこれまでの研究プロジェクトの蓄積を踏まえながら、本研究ユニットによる共同研究を進めるとともに、その成果を積極的に発信していきたい。立ち上げ時のメンバー以外からの参加や交流も、本研究ユニットのメンバー一同が望むところである。

参考文献

吾妻重二，2016，「はじめに」吾妻重二編『文化交渉学のパースペクティブ——ICIS 国際シンポジウム論文

集』関西大学出版部, v-xiii.

藤田高夫, 2008, 「東アジア文化交渉学の構築に向けて」『東アジア文化交渉研究』1:3-7, (2023年12月5日最終閲覧, <https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/records/12192>)

佐々木衛, 2006, 「創刊の辞」『海港都市研究』1: [iii-iv].

佐々木衛, 2007, 「序」『海港都市研究』2: [iii].

陶徳民, 2009, 「紹介/創立趣意書」東アジア文化交渉学会ホームページ, (2023年12月5日最終閲覧, <http://www.sciea.org/>)

陶徳民, 2012, 「“東亞文化交渉學”的關鍵詞——全球化時代文化研究的視野與新視角」『東アジア文化交渉研究』関西大学大学院東アジア文化研究科, 東アジア文化研究科開設記念号:163-172, (2023年12月5日最終閲覧, <https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/records/12356>)

梅村麦生 (神戸大学大学院人文学研究科)

梶尾文武 (神戸大学大学院人文学研究科)

佐々木祐 (神戸大学大学院人文学研究科)